



<http://tohokuhelp.com>

Sendai Christian Alliance Disaster Relief Network

# 東北ヘルプ Touhoku HELP



出会いの連鎖 2013年を望見して ————— P2

菅恵美子チャリティーコンサート ————— P2

「東北ヘルプ親善大使」崔徳信さん ————— P3

「仙台市民クリスマス」と「崔徳信チャリティーコンサート」 — P4

支援の現状と支援の要請 ————— P8

報告と展望 「仙台・いわき食品放射能プロジェクト」 ————— P11

シリーズ・福島は今 第三回 相馬・南相馬報告 ————— P13

被災地に学ぶ～福島・宮城・岩手～ ————— P15

南三陸クリスチャンセンターを訪ねて ————— P17

No.2

News Letter

January  
2013

## 出会いの連鎖

### 2012年下半期を振り返り、2013年を望見する

2013年になりました。新しい年の最初に、私たちはこれまでの歩みを振り返っています。

東北ヘルプは、1か月で終了することを目指してはじまりました。それが2013年に至っても活動を続けていることは、不思議です。その歩みは、「出会いの連鎖」の物語として回顧されるものと思います。

2012年の冬、東北ヘルプは、11月24日に「菅英三子チャリティー・コンサート」を、そして12月14日に「崔徳信クリスマス・コンサート」を主催しました。更にその背景には、40年ぶりに復活した「仙台キリスト教連合主催・仙台市民クリスマス」の開催がありました。それは、まさしく一繋がり「出会いの連鎖」でした。

以下、その経緯について、感謝を込めて、皆様にご報告いたします。

## 「菅 英三子チャリティー・コンサート」

東北ヘルプは、今、組織の改編を始めています。

これは、11月1日の全体会の承認に基づくもので、現在の財団法人を中心とした体制から、NPO法人を中心とした体制へと漸次的に移行し、「細く長く」活動を続けて行くことを目指しているものです。

その最初の活動は、「有料協賛会員」の募集から始まります。「有料協賛会員」を100名募ることができたNPO法人は、「認定NPO法人」となることを申請することができます。もし「認定NPO法人」となることができれば、寄付者への税控除等の特典を得られることになり、社会的信用を獲得することができるのです。

この活動の最初に、世界的に知られるオペラ歌手の菅英三子さんがお力を貸してくださいました。昨年の晩夏、菅さんは、東北ヘルプのためにチャリティー・コンサートを開催

しようとお申し出くださったのです。私たちは心から感謝して、準備を進めました。2012年11月24日、コンサートは開催されました。この日、初めて、「協賛会員」の募集が、このコンサートで行われたのでした。

私たち東北ヘルプは、今までに何度もチャリティー・コンサートに「呼んで頂いた」ことがあります。しかし、仙台キリスト教連合の催事を別にしますと、自分たちで行事を最初から最後まで執り行うことは、初めてでした。多くの足りない点がありました。しかし、コンサートはとても素晴らしい内容となりました。仙台キリスト教連合関係の催事としては、過去最多の集客となり、会場はとても温かい空気に包まれたのでした。

このコンサートの開催が、もう一つのチャリティー・コンサートの開催へと展開します。善意に基づく出会いが、祝福の連鎖を生み出すのです。





## 東北ヘルプ親善大使」 崔徳信さん

韓国のキリスト教音楽は、80年代に大きな転換点を迎えました。当時、若者を中心として、それまでの伝統的な讃美歌だけではない、ポップスやフォーク、ロックンロールといった自分たちになじみ深い音楽を用いて讃美歌を歌いたいと考える人々が生まれていました。やがてその流れは大きなものとなるに及び、まったく新しい讃美歌が生み出されます。その新しい讃美歌はCCM (Contemporary Christian Music) と呼ばれるようになりました。この新しい讃美歌は、多くの人々の慰めとなり、力づけ、あるいは献身者として立ち上がらせるきっかけとなったのです。

この流れは一人のアーティストによって生み出されたものでした。そのアーティストとは、崔徳信（チェ・ドクシン）さんです。崔さんは、「その名」「私」「あなたを愛す」などといった曲で、讃美歌の可能性を大きく広げた人です。その楽曲は数百曲におよび、その名前は韓国のだれもが知っている、崔さんはまさしく「スーパースター」でした。

私たち東北ヘルプは、2012年9月17日、在日大韓基督教会等の関係各位のお力をお借りし、韓国キリス

ト教協議会（KNCC）の皆様をお招きして、在日韓国基督教総協議会（CKJ）とご一緒

に「第二回東北日韓キリスト者信仰回復聖会」を、仙台にて開催いたしました。この催事は、既にホームページでお知らせ致しました通り、2011年11月に行われた第一回の聖会に続いて行われたもので、盛会の内に終了することができました。

力強いメッセージと音楽が中心となったこの会に、崔さんは出演アーティストの一人として来日くださったのです。そしてそれだけではありません。崔さんをはじめとしたアーティストの皆さまは聖会の後、そのまま被災地域の仮設住宅

をいくつも回ってくださり、音楽と祈りで、傷つき困難の中にある人々を励ましてくださったのです。（このことも、既にホームページでご報告いたしました通りです。）

被災地の仮設住宅ですから、そこにスポットライトが当たる舞台はありません。それでも皆さまは心を込めて音楽のメッセージを被災地に届けてくださったのです。それは、東北で支援を続ける私たちにとっても大きな励みとなりました。皆さまの熱意は、震災から2年を経ようとする中でなお、多くの方が祈ってくださっていることを雄弁に伝えてくださったのです。

聖会と仮設住宅訪問が終わる頃、崔さんをはじめとしたアーティストの皆さまと私たちは打ち解け、信頼関係を確かなものとしていました。



第二回 東北日韓 キリスト者信仰回復聖会 '12.917



宮城県内の仮設住宅で。右端が崔徳信さん

その中で私たちは多くのお話を伺いました。それはなぜ崔さんが無名に近い私たちの会に参加して下さったのかというお話でした。

崔さんは、中学校から高校にかけての4年間を、日本で過ごしていたことがあったそうです。お父様は、栃木県にあるアジア学院で学び、北海道で農業に関わる研究と働きに従事されたのでした。そのために多感な時期を日本で過ごした崔さんは、自らの人生にも、音楽にも日本の文化が大きく影響しているとお話しく

ださいました。そして韓国に帰国され音楽大学を卒業し、音楽家として活動され有名になられた中でも変わらず、崔さんは日本への愛着を持ち続けて下さったのでした。

そうした中、東日本震災が発災します。大きな地震に揺さぶられ、津波に呑みこまれて跡形もなくなってしまった田畑や家々。そして雪の中で寒さに震えながら何日も過ごさなければならぬ人々。テレビの画面を通して写されるその光景はあまりに衝撃的な

ものであったと、崔さんは語ります。

崔さんはそれから何度も日本に足を運び、韓国で支援の働きを始めてくださいました。そうする中で今回、私たちの聖会の事を知り、駆けつけて下さったのだというのでした。

崔さんの日本への温かい想いに、私たちは胸を打たれたのでした。

被災地という大きな問題の前に、私たちは今なお立ちつくしています。そしてこの9月に崔さんは音楽を通して被災地の私たちを支えようとして下さった。すべての予定を終えて帰国されることになったとき、私たちは、崔さん一つのお願いを試みることにしたのでした。それは、崔さんに「東北ヘルプ親善大使」になっていただけないか、というお願いでした。厚かましい申し出でした。しかし崔さんはにっこりと、確かな笑顔で引き受けて下さったのでした。



## 「仙台市民クリスマス」と「崔徳信チャリティー・コンサート」

菅さんのコンサートを準備する中で、上記の出会いがありました。そして更に、菅さんのコンサートはその過程で一つの新しい（そして懐かしい）催事を生み出します。

菅さんからチャリティー・コンサートのお申し出を頂いたことは、私たちにとって、とても意義深く感じられました。

東北ヘルプは、仙台キリスト教連合の震災対応部局です。仙台キリスト教連合の前身は、1970年代に日本基督教団の仙台・塩釜地区牧師会が他教派の牧師を招く形で始まりました。集まった超教派の牧師たちは、共働して「仙台市民クリスマス」等を開催していたのでし

た。1988年、この牧師会の代表であった菅隆志牧師が急逝されます。この菅牧師こそ、菅英三子さんの御尊父でした。菅牧師の急逝後、初めて日本基督教団以外の牧師が、この会の代表となります。そして「大嘗祭」という出来事が起こり、仙台圏の教会の立場を声明文として表さなければならぬ事態となる。こうして、名実ともに「仙台キリスト教連合」が誕生します。

こうしてみますと、菅さんの御尊父は、仙台キリスト教連合にとって、その立ち上がりの節目に忘れがたく登場した、大切な「恩人」だったのです。

東北ヘルプ事務局長の川上は、感謝を込めてこのことを菅英三子さんにお伝えしました。その時、菅さんは、御尊父がお元気であった頃、仙台キリスト教連合が主体となって「仙台市民クリスマス」が開催されていたことを懐かしく思い出されました。そして、その復活ができればと、私たちは夢を語り合ったのでした。

するとほどなく、菅さんから電話があります。「仙台市民クリスマス」を行うのにちょうどよい日程で、ちょうどよい会場が予約できたので、やりましょう、と。





もお願いされたわけでもなく、手伝っていただきました。

そうして14日となります。

「クリスマス・コンサート」で崔さんは、共演のYoonji (ユンジ)さんと共に、心を込めて音楽のメッセージを届けてくださいました。

代表曲である「私」「その名に」はもちろん、クリスマスソングから

はロックミュージックとして大胆なアレンジを施した「O, Holy Night」、オリジナルソング「Immanuel」が歌われました。更に、震災時アメリカでレコーディングをされていた崔さんが、その場のアーティストの協力を得て、作成した日本語での讃美歌であり、日本への応援歌でもある「愛する友よ」。美しいメロディーと、その中に込められた讃美と祈

りは私たちの心を確かに癒し、神への賛美へと想いはばたかせ、またクリスマスの喜びを新たにしてくださいました。

素晴らしい賛美の時間を共にした後、東北ヘルプの吉田隆代表から崔さんに「東北ヘルプ親善大使任命状」をお渡しいたしました。華々しくも厳粛な雰囲気の中で、変わらぬ確かな笑顔で崔さんはこの任を、改めて引き受けてくださいました。



ステージで親善大使に



Yoonjiさん

「仙台市民クリスマス」は、高橋絵里さんの独唱に始まり、祈祷・聖書朗読・説教の合間にクリスマスの讃美歌が聖歌隊によって奉唱されました。菅さんも崔さんも聖歌隊に加わっていただきました。崔さんの「インマヌエル」独唱と、菅さんの「さやかに星はきらめき」独唱に挟まれるようにして、吉田隆代表が説教をしました。「震災の中でも、放射能の恐怖の中でも、神様は、どこにも行っておられなかった。神様はいつも、そばにおられるのです。」というメッセージが、語られたのでした。

**見よきょうだい  
共に座っている  
なんという恵み  
なんという喜び**

と語るエンディングの歌を以て終了した会場は、文字通り多幸感にあふれていました。

新年にあたり、東北ヘルプは二つの方向へ、広がりりと深まりを求めて

進みたいと思っています。

一つは、地元にある一つ一つの教会・団体・地域です。現場から離れては、どんな支援も空疎となるでしょう。現場は、足元・地元にあります。地元の教会の一致を求めて、私たちは仙台キリスト教連合の一部として、いよいよ理解と連帯を求めて行きたいと思っています。そうした中で、菅英三子さんが協働していただきましたことは、私たちにとって本当に心強いことでした。

そしてもう一つ、今後、東北ヘルプは世界との連携を深めていきたいと考えています。特に、韓国の教会の皆様との連携を強化したいと願っています。韓国の皆さまが、本当に熱い思いで被災地を祈り支え続けてくださっているからです。このことは2年目から3年目の活動を展望する私たちにとっ



て、代えがたい支えとなっています。その連携の中で崔さんが親善大使として両者を繋いでくださることは、これ以上ない助けです。

日本と韓国の間には、歴史・戦争・領土等、多くの問題が存在するのは悲しい事実です。また、地元の教会もまた、高齢化の中で震災後の日常を生きる日々に、疲弊し息切れを見せています。

そうした中で、容易く分断が引き起こされることでしょうか。しかし分断は何も生み出すことがないでしょう。私たちが目指すべきは、避けが



たく分断が生ずる中で、互いのために和解を訴え、そのために祈り、自らを献げることではないでしょうか。

パウロという人が聖書に有名な言葉を残しました。それは教会という人の集団を、一つの体にたとえる言葉です。パウロは弱い部分に注目します。弱い部分こそが、身体を一つに結び合わせる。だから弱い部分を軽んじてはならないというものです（1コリ12：20-26）。

私たちの生きる世界においては、あるいは、分断が不可避である、というのが現実かもしれません。それ

に加えて、震災は多くの人を困難の中に陥れていまに至っています。しかしそこに解決のヒントがあるかもしれない。私たちが震災に痛む人々と共にあるならば、私たちは祈りを通して、何度でも、一つになる可能性を持っているはずで

私たちは、そのようにして皆共に主に用いられることを通して、一人一人の被災者各位が絶望から抜け出し、希望を見出すことを心から祈り励んでいます。そうした私たちの働きが、混乱の中にある世界に和解を示す「燭台に置かれたともし火（マタイ5：15）」となることを、私た

ちは望見しています。小さな地元の出来事が、世界の平和に直結して行くのではないかと、望見しているのです。

2012年の下半期を振り返り、そこにあった出会いの連鎖を辿る時、私たちは大望を抱きつつ足元を一步一步踏みしめて進むことができるような気がしてきます。

新しい年も、どうぞ宜しくご支援の程、お願いを申し上げる次第です。

2013年1月1日

阿部頌栄・川上直哉 記



## 支援の現状 と支援の要請



川上事務局長による全体会での現状報告

頌主

この度は東北ヘルプへの支援の可能性をお示しくございましたこと、本当に心強く存じます。以下に、現状を整理してお伝えし、感謝を含めて支援の要請をさせていただきます。

### 1. 現状

(1) 現在の支援組織は以下の通りである。

#### a. 仙台キリスト教連合

任意団体。仙台圏にあるカトリック・プロテスタント・諸キリスト教団体からなる緩やかな連合体。代表と世話人によって意思決定がなされている。



#### b. 仙台キリスト教連合被災支援ネットワーク（東北ヘルプ）

上記「連合」の被災支援部門。上記「連合」の総会（「全体会」）にて設立され、「連合」世話人会に報告義務を負っている。募金と情報を収集・整理・配布することで、教会再建・教会ネットワーク構築・民生支援を行っている。2011年3月18日設立。

#### c. 東北ディアコニア（東北ヘルプ事務局）

一般財団法人。上記「ヘルプ」の事務を担当する。海外から一括で多額に送られてくる資金を管理するために設置された。「ヘルプ」の理事によって理事会と評議員会を構成している。2011年9月30日設立。

(2) 現在の被災地の様子は、以下の二つに分類される。

#### a. プレ-震災＝「不安」という放射能被害

地震の後に生じた原子力発電所爆発事故の結果は、まだその全容が見えていない。現在5万人を超える福島県民の避難者が出ている等、既に大きな影響が出ているとはいえ、未だその被害は拡大する心配を留めていない。今後、大規模な健康被害などの可能性も予想され、パニックが生じることが懸念される。この問題の核心は、「不安」にある。

#### b. ポスト-震災＝「孤立」という津波被害

地震の後に生じた津波は、15000人を超える人命を一瞬にして奪った。40万人を超える人々が避難を余儀なくされた

後、徐々に自立への取り組みが展開している。その過程において、取り残される人々のケアが求められている。この問題の核心は、「孤立」にある。

## 2. 対策

上記現状に対して、東北ヘルプが取りうる対策を検討するならば、以下の通りまとめられる。

**(1) 東北ヘルプの可能性：東北ヘルプは、自らの強みを活かして、以下のように「不安」と「孤立」に抗する。**

### a. 教会ネットワークであること＝「密着」しつつ「直結」していること

東北ヘルプは、現場を重視する緩やかなネットワークであつた。このことによって、東北ヘルプは、地域に根差して住民に「密着」し、且つ、世界と「直結」しているという特徴を帯びることとなった。結果、地域のリソースを活用しつつ世界の力を集めることができ、有事の機動的な活動を可能ならしめた。今後東北ヘルプは、この特徴を活用するのみならず、同様の枠組みを他地域（特に福島）に移植することができる。このことによって、東北ヘルプは諸教会・団体と連携して「不安」という問題に取り組むことができる。

### b. キリスト教の思想に根差していること＝ギリシャ人には愚かなことに取り組むこと

支援の限界を考える際、支援の目標として「自立」が目指されなければならない。そして、「自立」が進むほどに問題となるのが「孤立」という問題である。自立する力のある人は、次々と仮設住宅から出て行く。遺され

た人への支援は細って行く。教会は、最後まで一人の魂を見続ける原理（ルカ伝15章等）を持っている組織である。とりわけ被災地にある教会はその原理に忠実であるとしている。その教会のネットワークを用いることができる東北ヘルプは、諸教会・団体と連携して「孤立」に取り組むことができる。

**(2) 具体的施策：上記に即応して、具体的施策を以下の通り提示する。**

**a. 不安に抗するために、3つの施策がある。**

#### a-1 短期保養プロジェクト

「不安」に抗すべく地域への「密着」を強める働きとして、短期保養プロジェクトを推進する。空間放射線量の低い地域へと放射能被災者世帯を数日間廉価で定期的に避難させるための支援を行い、その支援の中で被災世帯との長期的な関わりを進め、経年変化を見守る。こうしていち早く被災者の身体的・社会的変化を把握し、アドボカシーへと繋げる。このプロジェクトは「ふくしまHOPE」プロジェクトと連携し、2016年まで継続し、その後の展開を検討する。

#### a-2 食品放射能計測プロジェクト

「不安」に抗すべく地域への「密着」を強める働きとして、食品放射能計測プロジェクトを推進する。来所者が持ち込む食品や尿・母乳を無料で検査し、更にもその結果を伝える際にスピリチュアル・ケアを行う。この支援の中で内部被爆の防止のみならず、地域において内部被爆が起こっている可能性をいち早く察知し、警告を発しアドボカシーを行う。このプロジェクトは国内募金によって永続化させる。

#### a-3 地域連帯と国際的連帯の構築

上記プロジェクトによって獲得された地域の情報を全国および世界に直接伝えるルートを確保し、以て「不安」に抗するための備えとする。そのために、

(1) 地域の教会同士の連帯を強め、各教派が接続している世界組織と連絡しあい、(2) 他宗教との連帯を構築し、日本国内のアドボカシーへと直結させ、(3) 諸宗教間連携の姿を示して世界に積極的なメッセージを発する。

具体的には、9月17日に「韓国基督教教会協議会(KNCC)」と共に福島のための祈禱会を仙台市内で開催し、9月29日に諸宗教者による全国組織「宗教者九条の和」と共に仙台市内でシンポジウムを開催し、10月8日に福島県内の教会で構成する「福島県キリスト教連絡会(FCC)」と共に福島県須賀川市内でワークショップ「福島の震災を語る会」を開催した。今後、10月31日から11月5日に行われる「アジア教会協議会(CCA)」がインドネシアで開催する「環境・経済・アカウンタビリティ」に参加し、12月3日から一週間の日程で福島県会津市内で行われる「原子力を考える宗教者国際会議」に「FCC」「会津市民放射能情報センター」「原子力行政を問い直す宗教者の会」と共に参加する。そして2013年10月に韓国釜山で行われる「世界教会協議会(WCC)」にニュージーランドの諸教会と共にブース展示を行う。こうした機会を通じて、福島県で生起している具体的事象を世界に発信する。



## b. 「孤立」に抗するために、以下の3つの施策がある。

### b-1. 仮設住宅支援プロジェクト

「孤立」に抗すべく仮設住宅の自治機能を強化する。支援者と共に仮設住宅自治会責任者の協力を得て仮設住宅住民へのアンケートを行い、その分析を行って、仮設自治会責任者と共にその内容を検討し、現在の状況に合致した支援を組み立て実行する。2013年度までの継続を目標とする。

### b-2. 内職支援プロジェクト

「孤立」に抗すべく各被災者の経済的自立を支援する。既に開始されている「だるま制作」（身延山の技術供与と販路を得て開始された若林区の津波被災者によるだるま制作）や、「ハートニット・プロジェクト」（岩手県沿岸部の仮設住民による毛糸手編み製品制作・販売の支援と販路の開拓事業）といった「内職」の支援を展開し、更に持続性を獲得するよう努める。2013年度までの継続を目標とする。

### b-3. 「臨床宗教師」の確立

「孤独」に抗するための支援は、長期化する。経済的基盤は細って行く。支援者が福祉や医療等の資源を活用できるようになることが求められる。また、仮設住宅住民に限らず、津波によって生活を一変させられた人々は、肉体的・経済的な困難の中にあり、逝去者の数も増加している。各宗教者はケア対象者（信徒等）の背後にある家族・福祉関係者・医療関係者との連携の必要に迫られている。

宗教者は長期間一人一人の魂に寄り添う。その特徴こそ「孤独」に対応するものと思われる。実際、今次の震災において、宗教者は共働し「心の相談室」を立ち上げた。「心の相談室」とは、医療者を代表（室長）とし、宗教者を副代表（室長補佐）とし、宗教学者を事務局長とし、諸宗教者が合議し移動傾聴喫茶「Café de Monk」と無料電話相談とを行う任意団体である。この任意団体は、喫茶と電話相談の告知のために、2011年9月～2012年9月まで、ラジオ放送を行い、この放送は書籍となって発刊され

た。東北ヘルプはこの「心の相談室」立ち上げの発起人となり、現在も東北ヘルプ事務局長は副代表（室長補佐）の任に就いている。

この「心の相談室」の活動を永続化するために、支援に従事している宗教者および被災地の宗教者個人に医療者や福祉関係者と連携するための訓練を施しつつ、諸宗教者の協働を持続して公共性を獲得する努力を続け、「臨床宗教師」を確立する。このために、2012年3月、東北ヘルプは東北大学と共働し、「実践宗教学 寄附講座」を設立し、事務局長が運営員長に就任した。今後この講座を2014年度まで運営し、この講座によって「臨床宗教師研修」を実施する。既に第一回を終了し、12名の修了生を輩出した。第二回目の研修は2月・3月に行われる。

## 3. 支援の要請

上記対策の内、特に現在資金的な困難を抱えている事業は、「a-2」にある食品放射能計測所の運営事業である。

「a-2」については、最低限の活動を継続するために年間約1200万円を必要としている。2013年の運営に向けては、初年度（2012年度）資金をくださった海外の支援団体に支援の継続を申請しているが、資金獲得の成否は尚不明である。現在、国内の大学関係者・同窓会関係者に募金を行いつつ、全国・全世界の教会に支援を要請している。別表に年間経費の算出表を、別紙に最近の報告書を提示する。ご高覧を賜り、ご支援を賜れば幸いです。

2012年12月20日  
作成 川上直哉  
(東北ヘルプ事務局長)

別表1：食品放射能計測書 年間経費算出表

勘定科目	金額	備考
給与手当	5,400,000	150,000×3人×12カ月 計測スタッフ給与
法定福利費	810,000	給与手当×0.15
会議費	60,000	5,000×12回(定期)
広報費	120,000	共通HPメンテナンス費用、パンフレット作成
通信費	120,000	電話、インターネット回線料金。案内郵送料
渉外費	5,000	定期検査作業お土産
備品費	300,000	NaI計測機保守校正料金
	200,000	洗剤、クイックルワイパー、浄水器フィルター等
	100,000	事務備品等
消耗品費	720,000	水道(20,000)+電気(40,000)×12カ月
旅費交通費	600,000	運営会議旅費(5,000×9人×10回) 他
警備費	126,000	alsoc(10500円×12カ月)
賃借料	2,748,000	いわき・仙台計測所家賃
予備費	691,000	
支出予想計	12,000,000	

## 仙台・いわき食品放射能計測プロジェクト

# 報告と展望

作成：食品放射能計測プロジェクト共同運営委員会

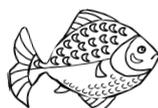
私たちは、NCC-JEDRO様を通して、世界のキリスト教を母体とするネットワークによって支えられ、仙台といわきにおいて食品放射能計測所を開設し、放射能による恐怖、不安と悲嘆に苛まれている被災者に寄り添う活動をしてまいりました。この活動を通して、放射能による被災犠牲者には、魂の平安に繋がる活動が、必要不可欠なものであると確信を得ました。この活動をお支え頂いておりますことを心から感謝いたします。以下、これまでの活動の報告と展望を記し、感謝の表れとさせていただきます。存じます。

## 報告

### 1. 魂のケア

私たちは、他の市民放射能測定室とは異なり、計測に時間のかかる母乳・尿の計測、すなわち内部被曝に関わる計測を積極的に行ってきた。これらの計測活動に対して計測依頼者様がFacebook、Twitter などSNSにより感謝の言葉を情報発信して下さったことは大きな励みとなっている。特にそこで評価されていることは、計測された数値の精度そのものもさることながら、不安と悲嘆の中にある放射能被災者の言葉を聞き、その魂にどれだけ真剣に寄り添おうとしているか、だった。

食品放射能計測所の中には、CPC (Clinical Pastral Care) の場所が設けられていて、計測依頼者の不安や悩みを専門職員や計測所のチャプレンが傾聴してきた。その数は4ヶ月間で81件となり、更に増加傾向にある。また、リピーターも多い。これはこの計測所の大きな特徴となっており、世界のキリスト教界が支えている食品放射能計測所として真にふさわしい活動になっていると考えている。



### 2. 放射能の計測

#### a. 食品の計測結果と分析

開所以来仙台食品放射能計測所に持ち込まれた検体の数は409件となり、計測依頼者の希望による一部の例外を除き3600秒以上の計測を行った。これ以下の時間では定量限界がヨーロッパ諸国の基準よりも大きくなるので、単なるスクリーニング検査となるからだ。そこで、できるだけ誤差を減らした上で、計測依頼者に対して値の説明に努めた。故に、当計測所の結果報告書にあるN.D. (Not Detected) は、「(誰かが定めた) 任意の数値を下回っている」という意味ではなく、「検出限界値以下である」ということを意味するものとなった。

これらの計測の内、土壌や水、人由来物など基準の違うものを除いた「食品」のみの計測は255件あった。その結果のうち、食品に含まれる放射能についての日本の基準100Bq/kg (2012年4月) に触れるものは10件(3.9%)であった。しかし、同じ結果をウクライナの基準に当てはめると16件



計測結果の説明をしています

(6.2%)の基準超えとなり、ヨーロッパの基準にあてはめると26件、10.1%が基準超えとなる。そして、世界で最も厳しい基準を提唱しているECRRの基準に照らすならば、大人の基準で33件(12.8%)、子どもで50件(19.5%)の基準値超えの食品があった。つまり日本では、食品中に含まれる放射能の規制基準が100Bq/kgと高いことから、食品に含まれる放射能の数値があまり問題となっていないが、他国の基準からするならば問題とされるべき数値の食品が看過できない程度に流通しており、それを日本の人は我が子にも食べさせているという実態が明らかになってきた。

特に顕著な放射能の値を示した食材は、椎茸などの菌類、筍、キウイ、イワナなどの川魚であった。これらのものから検出された500Bq/



真剣に計測所の説明を聞く見学者

kgを超える数値は、原発事故直後に制定された暫定基準にすら抵触する。

しかも、これらの高濃度汚染食材は福島県産だけではなく、宮城県北部や栃木県北部など福島県以外にも及んでいる。当計測所に食品の計測依頼をする人々は、ある程度放射能のリスクを考えて食材を選んでいる人々と推測されるが、その人々をしてこれだけの基準超え食材を購入していることは、そうではない人々には潜在的なリスクがあると認識せざるを得ない。

なお乾物に関しては水分が蒸発して質量が減り、更に水分による自己遮蔽が無くなる事から質量単位の放射能がより高く検知されると推測される。茶葉などもそのまま食すのでなければ通常もっと希釈されることになるので、単純に放射能の値だけで判断しないほうがよいものもある。厚生労働省が出した放射能測定のガイドラインにも同様のことが掲載されているが、厚労省のものは計測前に希釈することが勧められている。これは水による遮蔽を考慮していないので、我々はこの手法を採用していない。

## b. 内部被曝

食品放射能計測所では、内部被曝を調べるために72件の尿計測と3件の母乳計測を行ってきた。民間で尿計測を行っているところは他には無く、しかも研究施設に依頼すると1件で2万円ほどの料金を請求され

る。そこで、無料で、比較的精度の高い計測をする当計測所に依頼が集中することとなっている。尿計測はバックグラウンド計測に10時間、本計測に10時間を要する計測となる。機器が極端に雷撃に弱いので、雷の多い季節にはしばしば計測が中断し、職員に週末出勤を余儀なくさせることとなった。使命感の強い職員が与えられたことは感謝に堪えない。精度の高い計測をするために、測定器本体の遮蔽の他に、水や鉛ブロックによる二重三重の遮蔽が必要だった。これらの精度を生み出すための努力は、通常食品放射能計測にも反映されることとなった。

計測の結果、3件の母乳からは放射能による有意な数値は全く得られなかった。また、尿計測に関しても72件中、2Bq/kgを超える数値が出たのは1件のみだった。その1件は8Bq/kgだった。水は自己遮蔽するので通常の食品よりも数値は出にくい。汚染地帯である郡山市の沼の水を測っても40Bq/kg程度なので、尿から検出された8Bq/kgという数値は明らかに異常値であると言えるだろう。しかし、同じ家に住んでいた家人2名の尿からは放射能は検出されなかった。彼女らは別の物を食しており、マスクを常用していたということである。故にこの方の被曝は原発事故直後から自家栽培の汚染野菜を食し続けたこと、マスクなどの呼吸器からの被曝を考慮して生活してこなかったことなどの原因が考えられる。成人のCs体内半減期は約90日なので、食事と呼吸に気をつけた上で、3カ月後の再計測をお勧めした。

## 3. 講演活動

食品放射能計測所発足以来、私たちは、食品放射能計測所の職員を派遣し、放射能から子どもを護

るための食事等についての講演活動をしてきた。具体的には、放射能から身を守るための栄養講座を3回、「お母さんのお茶会『ここから』」に参加しての栄養指導が10回。食品放射能計測所利用者に対する「栄養ニュース」の発行が13回となった。「栄養ニュース」は食品放射能計測所のホームページから自由にダウンロードできるようになっている。放射能について不安を抱いている方（主に小さな子どもを持つ保護者）と接点を持ち、その不安に寄り添うために非常に有効な場となっているのでこれからも続けていきたい。

また、東北ヘルプ理事で、食品放射能計測プロジェクトの運営委員である三枝理事も講演活動を6回行った。

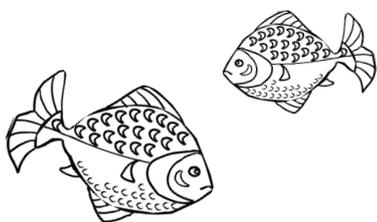
## 4. 課題・克服すべき問題

関東、東北に多くの市民放射能測定所が開設されてきた。これらは、公的機関の発表する放射能値を甘んじて受けるだけでは得心せず、自ら持ち込んだ食品の放射能を計測することでその身を守ろうという市民の呻きの発露だろう。しかし処理技術の未熟さや数値を読み取る際の誤解から、公表してはならないであろう怪しげな数値が独り歩きするようになってきている。

一方、行政が主体となって開設された公的計測所の中には計測時間15分のところもある。このような短時間計測では、検出限界値50Bq/kgも怪しいだろう。全国市民放射能測定室ネットワークの会議でもこれが問題視され、「測る測る詐欺」とまで呼ばれていた。

市民が心の拠り所に行っている放射能測定室が、逆に測定根拠の薄い数値によって市民の不安をあおる結果になっている。あるいは、行政は決して安心と言えるような数値を提供出来ない状態で運営されている。こうした事態を防ぐためには計測職員

に対する技術講習と共に、市民放射能測定室がクロスチェックを依頼できる場を設けることが必要となる。しかし圧倒的な測定精度を持つGe方式の $\gamma$ 線スペクトロメーターを導入している測定室は、全国の市民放射能測定室ネットワークでもわずか3箇所しかない。しかも、その内の2台は維持費がかなりかかる液体窒素冷却方式を取り入れているので、安価でクロスチェックを依頼できる場所は皆無といってよい。これでは多くの市民放射能測定室はクロスチェックの機会と信頼を失い、彼らの尊い志が無駄な労苦になってしまいかねない。



### そこで新しい年度に許されるならば、東北の市民放射能測定室に先駆け、ペルチェ素子方式のGe式放射能測定器を1台、導入したいと考えている。

東北ヘルプといわきCERSネットが行っている食品放射能計測プロジェクトは、Ge式放射能測定機を利用して食品の計測が可能な空間放射線量率の低い仙台に計測所を持っているので、新たな設置場所を探す必要がない。また、国立の研究機関でGe式放射能測定器を使用して実験をしてきた経験のある優秀なスタッフがいる。現在導入を希望しているテクノエーピー社製Ge式放射能測定器TG150Bは、ペルチェ素子（電気）を使用してGe計数管を冷却しているので、液体窒素方式に比べてはるかにランニングコストが安い。これは、関東で活躍している一ノ瀬ラボ（長野県）でも採用されている機種だ。この機種があれば、母乳や尿の高精度の計測のみならず、

広く他の市民放射能測定室に対してクロスチェックの機会を提供し、正確な計測活動ができるようにサポートできるだろう。これは、放射能被害の渦中であって、愛する者のいのちを護ろうとしている人々には大きな朗報となる。そして、この機械を使いこなす能力を有している当計測所が、莫大な数の裨益者を得る事となる。

私たちの計測所においでになる方々の不安と悲嘆にある魂に、「気安め」を語るだけならば、現在の機械でも可能である。しかし、多くの市民放射能測定室に連なる人々の安寧に繋げるためには、公的機関が使用しているものと同様の方式の機種が必要であると判断される。

## シリーズ 福島は今

### 第三回 相馬・南相馬 震災支援書プロジェクト

福島第一原発は、福島県の太平洋沿岸部のちょうど「真ん中」あたりに位置していました。その南北には、大規模な津波の被害と共に、深刻な放射能の被害が重なる「二重の被災地」が広がります。

その北側に、相馬・南相馬の両市があります。私たちはこの地域への支援を継続しています。私達にできることは限られています。除染もできません。生活の保障もできません。しかし、人間の

尊厳にかかわることはできます。「あなたは決して打ち捨てられてなどいない」ということを、証することは、できます。それは、思いを寄せ、体を運び、出会い、そして記憶するという事です。

そうした活動は、10月も続けられました。良い報告書を頂きましたから、下記にお示しいたします。ご高覧を賜り、「福島は今」を知っていただく一助となればと願います。

#### 10月4日(木)

クラッシュ・ジャパンのミーティングに参加。9月の活動報告が行われた。小坂忠師のコンサートは大変喜ばれ、励ましを与えられたとのこと。ま

た、今月の予定、開催地を検討し、新しく「新地がんど屋仮設住宅」が予定された。他、「小池長沼仮設住宅」でも行う予定。

30、31日は同盟基督教団茅ヶ崎教会員の支援を受け、「トーンチャイムで歌おう」という催事を、大野台とがんど屋仮設住宅で開催されることが確認された。

12月はクリスマスプレゼントを用意することが話された。

### 10月8日(月)

福島の震災を語る会が須賀川シオンの丘教会に参加した。

### 10月10日(水)

図書館で読み聞かせのための絵本を借りる。午後「新地がんど屋仮設住宅」に「おはなカフェ」の案内を120部配布する。

### 10月11日(木)

ミニコンサート用の歌詞の準備、コピーを教会で行う。

### 10月12日(金)

新地がんど屋仮設住宅にて、「おはなカフェ」「絵本の読み聞かせ」「ミニコンサート」を開催

相馬教会と恵泉教会大喜多師と牛久恵泉教会から支援者がある。仮設住宅から11名の参加者と3名の幼児の参加があった。初めての場所でしたので少し不安であったが、責任者の協力があり、よい会となったことを感謝したい。

この仮設にお住まいの方々は、富岡町双葉町・浪江町・小高区などの方々で、主に放射能からの被避難者である。全く自宅に戻れない人達。この内特に小高区の方々については、家を失ったり、戻ることが困難となっていることを話して下さった。「いつ帰れるかわからないし、草が辺りを覆っている」と涙しながら笑顔で語っておられた。これからも、ゆっくりと交わり寄り添っていき、と思う。

### 10月15日(月)

大野台仮設住宅へ集会場を訪ねる。

20・22日に行われる支援の用意をする。第8仮設と第4仮設住宅を借りる手続きを済ませた。

### 23日(火)

「トーンチャイムで歌おう」の案内作成約300部を教会でコピーする。

### 24日(木)

午後小池長沼仮設住宅へ催事案内を配布(200部)

### 26日(金)

小池長沼仮設住宅にて「お花カフェ」「ポプリ作り」と「ゲーム」を開催。

支援者は17名の体制。少しのんびりと始める。葛西師のゲームで盛り上がる(じゃんけんゲーム/電話ゲーム)。顔なじみの方々が多く、和やかにポプリ作りを楽しむ。ローズとラベンダーの香りを包み、リボンで結びお花を飾る「ポプリ」。笑顔と歓声で良きときとなった。70代の婦人が29歳の娘を津波で失った悲しみの中でこれを飾ると言って涙を誘う。孫が小さいので可哀そうとも言われた。帰りに一人の男の子が支援者の一人といつまでも遊んでいたこ



とが印象に残る。

### 10月27日(土)午後

雨天の中、大野台第4.第8仮設に案内配布

### 10月28日(日)午後

雨天の中、新地がんど屋に案内配布

### 10月30日(火)

大野台第仮設住宅にて「トーンチャイムで歌おう」開催

支援者は15名。初めての所なので集まりが悪いと思われ、戸口で一軒一軒声をかけてみる。参加者は20名であった。トーンチャイムで童謡紅葉や故郷、里の秋等を楽しむ。一緒に楽器を鳴らし、歌うという作業に一生懸命になり声をだしていることに喜びを感じてくれた。又、稲津姉の巧み身体と頭を使った体操を楽しみ、「とんとんとんからりん隣組」の歌で若き日を思い起こした。

手作りのカステラでお茶を楽しむ。浪江地区の方たちは、家へは帰れないこと、家族が離れていることを話してくれた。「鉄道所唱歌」の替え歌を歌いながら涙し、これからのことに不安を語りつつ、生きていくことの不思議に心をはせていた。名取の方々は、津波で帰る家が無いと嘆く。また、ストレスで癌になり治療を受けていることなどを話して下さった方もいた。

### 10月31日(水)

新地がんど屋仮設住宅にて「トーンチャイムで歌おう」開催

参加者は、大人9名と幼児3名。支援者は、茅ヶ崎教会などから計20名。自治会のご厚意を頂き、良き会となり、「トーンチャイム」を楽しむ。今回は小高地区の方や新地釣師地区の方も参加。家を失い、戻るべきところが無いことなどで子どもの頃や育った町のことを懐かしんで話をされた。慰める言葉がなかった。茅ヶ崎教会の方の手作りクッキーやカステラでお茶を楽しみ、タオル体操で心と体を動かし小さなプレゼントも出来た。

一か月の働きを終え、被災者からうかがう話を反芻している。出会う人々にこの話を伝えつつ、次の支援に備えている。

担当:後藤一子



# 被災地に学ぶ旅～福島・宮城・岩手～

名古屋YWCA会員 脇田純子（70歳）

2012年10月16日

名古屋YWCAは東日本大震災後、支援プロジェクトを立ち上げ（1）シンチ・ハート・チーム（新地町の小学校とつなぐテレビ電話）（2）あるがままチーム（愛知近隣に来られた方々のつながりの場の提供）（3）チャリティイベントチーム（4）支援品 支援募金チーム を4つの柱として活動を続けている。そして今夏、福島の子供たちに安心して外で思いっきり遊んで欲しいという思いで「名古屋いりゃあせツアー」を企画し、福島の各地から11家族をお招きした。交流をする中で、やはり被災地に足を運び、見て・聞いて・触れ合いたいという思いが強くなり、一つの旅の企画が立てられた。その企画は、「被災地に学ぶ旅～福島・宮城・岩手～」と名づけられた。以下、その同行報告を記す。

## （1）福島見学

福島では、まず福島YWCAの方々の案内で福島市内のモニタリングポストを見学した。名古屋市の数値よりかなり高いことに驚きを感じる。

その後、この夏に桃を取り寄せてご縁のあった菊田果樹園を訪問。ご夫妻から福島市における果樹生産と出荷の状況についてお話を伺った。

「販売状況は決してよくないが、めげずにやっていくよりほかに他ない・・・」とのこと。目の前には、出荷間近のリンゴがたわわに実る。「もいで持って帰って下さい！」との声を頂き、リンゴ狩り気分を味わいながら、2個大事にカバンに入れた。

続いて、飯坂温泉旧堀切邸を見学。静かで趣深いたたずまいの町並みは、ゆっくり散策したいと思わせる場所であった。しかし、観光客は激減した様子であり、町の人たちの表情には厳しさがあらわであった。

その後、フルーツラインを走り、日本YWCA被災地支援事務所「カー口ふくしま」へ。カー口とはイタリア語で「たいせつな・親愛な」という意味とのことである。

夕食交流会では福島YWCAの方々と、いりゃあせツアーに参加にされた方々と一緒に懐かしく楽しいひとときを過ごした。放射線量の高い中で暮らす不安も語られ、原発の危険性を再認識した。

## （2）アミマーさんたちとの出会い

翌日は盛岡へ向かう。東北ヘルプの方々の出迎えをうけ、車に分乗してハートニットプロジェクト事務局へ。



ハートニット事務局にて

「ハートニット」とは、岩手県沿岸部の仮設住宅住民の方々に編み物を習得して頂いて「手仕事」を作ろうとするプロジェクトである。震災

後、食が届き、衣が届き、暖が確保されてくるうちに、次には心の癒しが必要だと感じ始めたボランティアの方が、編み物作業を通して女性たちの心に温かな思いを抱いていただければと、始まった。編み上げられた数々の作品は好評を博し、作品の商品化へと発展した。

この旅を計画する中で、何をお土産に持っていかうかと思案している時、「お土産にはぜひ毛糸を持ってきて下さい！」と伺っていた。急遽、会員や教会関係に呼びかけたところ、

4つのダンボール箱いっぱい集った。また、この旅の直前、名古屋YWCAではバザーがあり、岩手・宮城・福島の物産の一部として、ハートニットの編み物製品を並べ販売することができた。その売上金と共に、段ボール4つの毛糸を「お土産」としてお届けすることができた。

編み手の方々と、プロジェクトでは「アミマーさん」と呼ぶ。このアミマーさんたちを訪ねることも、この旅の大きな目的の一つだった。最初に平田仮設住宅集会所で、アミマーさんと交流。名古屋の販売会の様子等をお話しし、若い人向けに作られ



平田・甲子仮設住宅でアミマーさんと交流

た製品など見せていただいた。

次に甲子仮設住宅のアミマーさんにお会いした。毛糸に出会って無心になれる時間が持てたこと、編み物が今の生活の大きな慰めになっていること、自分の作ったものが誰かの手に渡っている喜びを覚えていること、などを話してくれた。帰り際に、夫の定年前に建てた家が流されてしまい、まだまだ落胆、無念の思いがぬぐえないと話された時には、言葉もなく思わず涙してしまった。

「編み物をすることによって、何もない所から一歩前に進む勇気と希望をもらいました」とおっしゃるアミマーさんたち。

心をこめて編み上げた作品が多くの人々の手に渡ってつながっていくこと、そしてその収益がアミマーさんたちのささやかな喜びになることを願って、これからの私達の活動を考えていきたいと強く思ったアミマーさんたちとの出会いだった。



釜石市で被災状況を視察



### (3) 岩手県沿岸部視察

今回の旅は、岩手県沿岸部の「今」を知る貴重な機会となった。

釜石では壊れた家屋が点在する中で、大槌町で家を流された被災者ボランティアさんから話を聞いた。「くよくよしていてもはじまらない。前向きに生きるためにボランティアしているのです」という言葉に頭が下がった。

大船渡・陸前高田・気仙沼の津波被災地を見てまわったが、更地になっているところに草が生え、その中に半壊家屋や打ち上げられた船が残されていた。その殺風景な風景は、かつての生活ぶりを想像することも困難な程であった。ただひたすら、言葉を失った。ある場所にはお地藏さんや十字架が置かれ、花が手向けられていた。思わず手を合わせた。一日も早い復興があるように。神から与えられたいのち

そして自然が守られ、生まれ、生かされる日本、世界であるように。原発から再生エネルギーへの転換が前進していくように。そう祈った。

### (4) 教会訪問

祈りの思いを抱きつつ、今回の旅では二つの教会を訪問させて頂いた。

まず私たちは、陸前高田キリスト教会を訪問した。森田牧師から当時の状況、今の思いなどをお聞きした。コーヒーのおもてなしを受け、阿部牧師の祈りをもって教会を後にした。

次に訪ねた千厩教会は危険建物となり、礼拝は信徒宅の広い部屋を利



津波が教会の寸前のところまで

用していた。現在は移転地を決め、今後土地を購入し建築の準備をすすめているとのこと。更に驚いたことに、教会の軒下や雨樋では極めて高い放射能数値が出たという。この教会の敷地が「ホットスポット」となっていたのだ。原発爆発事故現場から遥かに遠く思われる岩手県にも、大きな影響がでていることに、驚かされた。

### (5) まとめ

わずか3日間であったが実り多いものがあった。見たこと、聴いたこと、触れ合ったことを今後どのように活かしていくかを話し合っていたい。

福島YWCA、東北ヘルプの皆さんの温かいご協力に感謝している。

## 南三陸町 クリスチャンセンターを訪ねて

12月11日発災から1年9ヶ月、もうそんなに経ってしまったかと思う反面、被災した方々にとっては一変してしまった人生、あれから重苦しい日々が続いたに違いない。その間キリスト教系ボランティア団体でも国内はもちろん海外からも物資、がれき撤去、建物復旧、自立へ向けての支援などがなされてきた。

被災した地域の中でも最も津波の被害が大きかった南三陸町ではキリスト教系ボランティア団体が力を合わせ2012年6月にクリスチャンセンターが建設された。東北ヘルプも資金面の支援や人的支援に携わったことから、代表者で東北ヘルプの理事でもあるキリスト聖協団 仙台西教会の中澤竜生牧師にその経緯と役割を伺った。

中澤先生は発災前、とくにボランティアや奉仕を中心に教会生活を送っていたわけではなく他に仕事もちながら日曜日の礼拝を守っていた。震災の時はライフラインの停止状態があったので、それまでの日々に忙しさから「これで休める、仕事をしなくていい」と大喜びだった。しかし東京から「連絡の取れない牧師がいるから一緒に探してくれないか」と頼まれ震災4日目に東松島の避難所へ探しに行ったところ。そこで悲惨な状況を目の当たりにしてしまう。避難してきた人達はヒステリックで泣き叫び、怒鳴り合っている、人前で平気で喧嘩をしている夫婦がいる。トイレの悪臭がひどい。とても人間がいる環境ではない状態

をみてショックを受けたと中澤先生はいう。探している牧師はなかなか見つからず何力所も訪ね歩き避難所によっては腰まで水につかなければ行き着けないところなどもあった。とても寒いなか震えながら東松島市のほとんどの避難所を探し回ったが見つからず、最後の最後、最終的に確認のためにと、遺体安置所に行き、一体一体くるまれている毛布をめくって約200体程の遺体を見たそうだ。そこでも結局見つからずそのまま家に戻った。その時に「自分たちは難を逃れたが、現地ではあんな悲惨な状態なんだ」と思われた。その夜にもう一度他の場所を訪ねてみると、やっとその牧師と会うことができた。無事に生きていることを確認して各方面に連絡をとり、そこで終わるはずだったが・・・。

その直後、2つの支援団体（クラッシュジャパンと日本国際飢餓対策機構）から支援活動について相談を受け、東松島市と一緒にいくことになった。活動を始めて一週間もすると多くの支援団体が入り物資などが揃いだしたのでその場所は終わりにし、今度は自分のテリトリーである仙台近郊の名取方面に行こうと準備を進めた。いざ出発するというその朝に「そのまま南三陸町



へ来てくれ」とまたクラッシュジャパンの人から連絡が入った。南三陸町には教会がなく、教会バックアップ支援をミッションとしているクラッシュジャパンとしては支援活動に入りづらいところで、中澤先生に伝道所を紹介され活動をしていた。次第に活動をしている人たちも自分達のところへ帰らなければいけなくなるが、悲惨な状況はまだ続いており支援活動の必要性があった。そこで協力の要請に答え南三陸町へ入ることとなった。こうして中澤先生はそれまでの他の仕事も辞め本格的に支援活動を開始したのだという。

最初は避難所を中心に支援を続けていたが8月に避難所は解散することになり、被災された方々は抽選で59カ所ある仮設住宅に移っていった。住人の多くはせっかく出来たコミュニティがバラバラになり、新たな生活に不安を抱いていた。中澤



'12.12.11 気仙沼ホープセンター、基督聖協団 相模原教会、関東プレインズバプテスト教会がクリスチャンセンターの働きにより、マリナル保育園であさひ幼稚園と合同のクリスマス会が行われた。

先生は「支援活動は続けていくので必ず訪ねる」と約束をし、実際に離れてしまった人たちを探すために田尻畑仮設住宅の談話室を拠点とし点在する仮設住宅を訪ね歩きまわる日々だった。再び出会った人たちにその後の話を聞き、支援を続けた。そのうちにその境界のリーダーになっていく人が現れ、さらに支援を続けて仮設住宅との関係が深くなっていった。

被災した人たちの中には、将来的なことや近隣との関係、馴染めない生活などのために、なかなか落ち着かず心のよりどころがないなど不安を抱いている人達があった。そんな時リーダーたちの間から声が上がる。「土地を提供するので教会を建ててほしい」と。ボランティアからも「こういう心が殺伐としている時に布教したらいい」という声が次々に上がってくる。中澤先生自身も必要性を感じた。しかし地域の復興を目的としているので、教会ではなく『人々が集え、礼拝が守れ、ニーズを知り、情報を提供し、各ボランティアと協力し合え、迅速かつ柔軟な対応が出来る』センターを作ることが望ましいと考えた。それは現実化した。「クリスチャンセンターの設立である・・・」。建設に当たっては主にサマリズタンパースと国際飢餓対策機構、台湾のキリスト教連合で作られた救助協会、その他60以上の団体・教会からも協力を得て6月8日に開所式となった。

こんな話をお聞きした。センターの土地を提供してくれた方の話である。この方は避難所に居た時には目立った働きはなかったが、仮設住宅に入ってから「自分は何かしくてはいけない」との思いにかられ中澤先生に応援を求めてきた。先生は快くその思いに協力して一緒に働く、

そのうちに彼は徐々にリーダーとしての頭角をあらわし、様々なボランティア団体と繋がりはじめ、次第に大きな働きをするようになっていった。今は以前のキャリアを生かした会社を立ち上げクリスチャンセンタ



12.12.11 この日は歌津老人ホームでも同様のクリスマス会が行われ、皆様は、大変愉快そうに時を過ごしていた。この後大忙しだった。

一の一角に事務所に構え、またクリスチャンセンターの管理者として中澤先生と相互理解の上で運営を任せているという。

中澤先生は当初からこの地の方々に自分がクリスチャンであることを伝え、聖書の教えに従って関係を築き上げた。中澤先生は「今ここで、支援との交換条件で布教はしない。自分たちの働きを見て受け入れてほしい」と思い、宗教のセールスはしないという確固たる姿勢を貫いている。

中澤先生は『復興には地域のコミュニティが大事なので、コミュニティが元気になること、人と人の繋がりが豊になること』を願っている。そのためにクリスチャンがいるのだと考えている。クリスチャンセンターの役割は、支援活動のハブとして機能していくように考えている。スペースは支援活動に来るボランティアのため、また支援物資等の置き場として開放し、情報を集める

拠点と考えている。また、仙台から毎日のように来てあの場所から出かけて活動することが一つのステイタスだと話された。クリスチャンセンターという建物が、そして南三陸という地にあることが地域の方々の心の支えとなり、これからが能動的な活動をしていく段階だという。

中澤先生は「常に人とのつながりを持つ」ことを大切にされている。初期の頃から避難所を足繁くまわられ、仮設移住後はその後の所在を探し絶えず各戸を訪問されニーズや悩みを聴く、まさに顔の見える活動をされている。インタビューの中で、聖書のパウロを引き合いに出され「安否を問う」ことに重きを置かれていると話された。そのことが被災者の方々から受け入れられ繋がってゆく「証し」だと話して下さった。

クリスチャンセンターでは日曜日午後「サンデーサービス」として礼拝を守っているが、基本的にはクリスチャンたちがそこで養われ礼拝を守り、新しい一週間を迎えて活動に向かっていくための場所でありそのための礼拝であって、被災された方々を礼拝に招くのではない。被災者の方々はその場所を生活のために利用してもらい、「共同体」としてクリスチャンは物心両面をサポートし被災者の方々を向きあって行くことをテーマとしているのであり、それがだんだんに形になってきている。

地域に根ざす...というより、地域を生かし育てていくこと。そこから繋がりや連携が生まれ確かなコミュニティとなっていく。そのコネクターとしてキリスト者が用いられる。

復興の次のステップが見えてくる希望を感じる中澤先生との時間であった。(記・戸枝正輝)

## ご支援に感謝いたします

東北ヘルプ協賛会員

2013年1月 敬称略・順不同

- 【宮城県】小西 望 佐藤 光子 山田 真理 鈴木 桂子 高柳 ユミ 後藤 直子 西島 るみ 細川 麻紀子 木下 裕子 吉原 健雄  
高橋 麗子 荒木 えみ子 木村 れい子 斎藤 泰子 菅 基久子 戸枝 慶 角田 洋子 小林 澄子 奈良 靖 笠松 絹子  
金 南植 菊地 茂 金子 純雄 一条 好男 八巻 正治 木村 すげみ 戸枝 正輝 杉山 昭男 李 貞妊 布山 真理子  
木村 里江
- 【栃木県】平山 正道 平山 昭子 福本 知恵子 飯沼 一浩 西田 京子 福本 光夫 福本 正美 長嶋 清 長嶋 ヴァトン
- 【茨城県】森井 利夫 【埼玉県】櫻井 良一 【千葉県】谷村 和枝 【東京都】松浦 賢治 武田 隆雄
- 【富山県】桶谷 忠司 【大阪府】笹辺 美和子 【兵庫県】荻原 邦子 芦屋三条教会 飛田 雄一 【岡山県】岡田 真美子

## クリスマス献金者 ご芳名

- 【北海道】夕張伝道所(キ) 札幌発寒教会(キ) 遠浅教会(キ) 日高キリスト教会(同盟) 北星学園大学附属高等学校 とわの森三  
愛高等学校 太田一男・結子 苫小牧教会(キ) 真宗大谷派 聞光寺・佐藤智眼
- 【宮城県】仙台黒松教会(キ) 仙台青葉荘教会(教) NPO笑顔のお手伝い 仙台YMCA 尚綱学院高等学校 李貞妊 川上直哉  
遠藤優子 高橋原 吉村心語 三枝千洋 木村すげみ 谷山洋三 一条好男 古川明 佐々木市子 斎藤泰子 卸町東2丁目仮設住宅(記念  
写真プロジェクト) 桜ヶ丘家庭集会・川嶋聡・伸子 チェドクシン・チャリティーコンサート 菅英三子・チャリティーコンサート
- 【秋田県】秋田教会・日曜学校(教) 【山形県】山形本町教会(教) 荘内教会(教) 荘内教会保育園 山形六日町教会婦人会
- 【福島県】いわきサーズネット 【茨城県】森井利夫 【栃木県】西那須野幼稚園 福田美智子 西田京子
- 【埼玉県】復活書店・山口堯嘉 秩父神社 【千葉県】市民クリスマスイン千葉実行委員会・青木一芳 戸村千恵子 石川利平 石塚多美子
- 【東京都】日本ナザレン教団(ナ) 東京ユニオンチャーチ(単) 東京めぐみ教会(単) 小平教会(キ) 府中中河原伝道所(キ)  
柏木教会(キ) 中渋谷教会(教) 東京都民教会(教) 番町教会(教) 練馬二丁目伝道所(教) 経堂緑岡教会(教) 東京平和教  
会(バ同) 巣鴨聖泉キリスト教会(泉) NCC JEDRO 東京エクレシア会 明治学院高等学校 宗教法人神習教 広嶋京子 高村  
英子 佐々木迪淳 武田順児 松浦賢治 宮腰貞子 秋山光儀 八木宏仁 川島敬子
- 【神奈川県】愛のいづみキリスト教会(単) 横浜中央教会(改) 鶴見教会(キ) 片瀬教会(教) 茅ヶ崎平和教会(教) 茅ヶ崎東  
教会(教) 二俣川キリスト伝道所(姉) 現役音大生4人によるチャリティーコンサート 平塚YMCA 日本福音同盟 新川道子 斎藤  
順子 渡辺滋子 高柳博一 西尾和加子 【富山県】桶谷忠司 【石川県】常念寺 山田文禎 【長野県】松本教会(教) 小諸聖書  
教会(同盟) 原典聖書通信学習 飯田芳久 【岐阜県】大垣教会(改) 岐阜加納教会(改) 【静岡県】吉原富士見教会(改) 沼津教  
会(教) 【愛知県】今治教会(教) 高蔵寺教会(改) 天白教会(教) 矢作キリスト教会(同盟) 日本キリスト改革派中部中会ディ  
アコニア支援委員会 工藤公義 中島隆宏・祐子 【滋賀県】近江八幡教会(教) 福井達雨 【京都府】京都教会女性会
- 【大阪府】枚方くずは教会(教) 河内松原教会(教) 萱島キリスト教会(ア) 岸和田聖書教会(福交) グレース宣教会(福自)  
枚方聖書集会 大阪YWCAクリスマスバザー実行委員会 石橋教会・婦人部 笹辺美和子
- 【兵庫県】伊丹教会(改) 日本キリスト改革派灘教会(改) 住吉教会(キ) 芦屋三条教会(教) 西宮聖ペテロ教会(公) 北鈴蘭  
台教会(西ル) めぐみキリスト教会 神戸学生青年センター・飛田雄一 関西地区伝道協議会神戸地区分科会 神戸改革派神学校 荻原  
邦子 奥田喜亮 鶴崎祥子 【岡山県】南岡山ナザレン教会(ナ) 岡山伝道所(キ) 【広島県】広島教会(在韓) 広島栄光教会  
(イ) 【山口県】下松教会(教) 山口信愛教会(教) 【香川県】八栗シオンキリスト教会(福連)
- 【福岡県】福岡城南教会(キ) 自由ヶ丘キリスト教会(バ連) 日本キリスト改革派長丘教会女性会 天神聖書集会
- 【長崎県】山口カズ子 【大分県】井上和子 糸野和俊 天神聖書集会 【宮崎県】宮崎月見ヶ丘教会(単)
- 【海外】ヨイド純福音ドンチャク聖殿(韓) 純福音ノウオン教会(韓) オランダ日本語キリスト教会(オ) 【匿名】9名
- 一品寄付者ご芳名 アジア学院

(教) 日本基督教団 (改) 日本キリスト改革派 (同盟) 日本同盟基督教団 (キ) 日本キリスト教会 (ナ) 日本ナザレン教団  
(バ同) 日本バプテスト同盟 (バ連) 日本バプテスト連盟 (公) 日本聖公会 (ア) 日本アドベント・キリスト教団 (イ) 日本  
イエス・キリスト教会 (泉) 日本聖泉基督教会連合 (福連) 福音キリスト教会連合 (福交) 福音交友会 (福自) 福音自由教会  
(西ル) 西日本福音ルーテル教会 (在韓) 在日大韓基督教会 (単) 単立 (韓) 韓国 (オ) オランダ (姉) ウェルソ・ホリウチ教団

## 支援金・献金の受付口座

郵便振替

02200-3-126381

一般財団法人 東北ディアコニア

他金融機関からの振り込み用口座番号

ゆうちょ銀行 二二九(二ニキユウ)店 当座 0126381